<翻　訳>

ヨハネス・パウリ：冗談とまじめ（6）

Frühneuhochdeutsch 研究会訳
（代表　森　　昌弘）

ここに翻訳したのは1522年刊行のJohannes Pauli: Schimpf und Ernst第216話—第253話である（第215話までは『中京大学教養論叢』第30巻第4号，第31巻第3号，第32巻第2号，4号，第33巻2号に所載）。使用テキストは1924年刊のJohannes Bolte編（リプリント版1972年）を用い，適宜H. Österleyの版，その他を参照した。聖書に関しては『聖書新共同訳』（日本聖書協会1987年刊）に拠った。パウリの聖書の引用はほとんどすべてラテン語で，時とすると現今の聖書に一致しない場合，あるいは多少記憶違いと思われる箇所もある。それ故彼自身のドイツ語訳と重複する場合も，異同を明らかにするために，煩雑にはなるがすべてラテン語を添えて訳してある。聖書以外のラテン語も同じように扱った。

この翻訳は，Frühneuhochdeutsch研究会のメンバーが分担して訳したものを，最後に共同で検討修正したものである（訳の分担表は下記）。1993年1月現在のメンバー氏名はつぎの通りである。青木一行（名城大），大沢峯雄（名大名誉教授），木野茂（保健衛生大），工藤康弘（三重大），精園修三（中京大），中条宗助（名大名誉教授），中山淳子（竜谷大），橋本忠欣（福井大），森昌弘（中京大），山田やす子（皇学館大）（以上アイウエオ順）。

分担表

第216話—第218話	精園	第230話—第232話	青木
第219話—第220話	中条	第233話—第239話	大沢
第221話—第222話	橋本	第240話—第244話	森
第223話—第224話	山田	第245話—第249話	木野
第225話—第229話	森	第250話—第253話	精園

第二百十六話　冗談
洗濯女エヴァを手に入れた博士のこと

ある時ある町に博士号を持つ司祭が住んでいました。その頃農作物の出来がたいへん不作でした。一人の女がいて，その女に可愛い娘がいました。その女は洗濯女で，自分もしっかりした暮らしをしたいと思っていました。ある時その博士が一人で家にいますと，母親は娘を博士のところへやって，何か洗濯物はないか，母がいま洗濯物を灰汁に漬けるところだ，と言わせました。博士は，頼もう，と言って，手元にあるものを娘に渡しました。というのは，博士のところには下女がおらず，それでいてまともな一戸を構えていたからです。娘が母のところへ戻ってくると，母親が言いました。「どうだったい。」娘は言いました。「うまくいったわ。あの人ったら私を抱いて，軽くキスをしてくれたもの。」母親は言いました。「そりゃいい。事は半分なったも同じだよ。」さて，洗濯物が洗われ，乾かされ，折りたたまれ，そして博士がまたもや一人で家にいますと，娘が洗濯物をもってやってきて，そこで合意が成立し，さらに博士が母親をも家に引き取るところまで話が進展して，もはや誰も二人を引き離すことはできませんでした。

市参事会のお歴々はそのことで博士を非難しました。そのとき博士はこう言いました。「天国のエヴァだってアダムをだました。あのエヴァが私をだましたとしても，何の不思議があろう。」その娘の名はエヴァでした。かくして誰も二人を引き離すことはできませんでした。

同様に，不倫の悦楽に耽る柄でもないのに，すべての恥を忘れて，こうしたことをする人がままいるものです。それゆえ，悪魔がくっつけるものは引き離すことができません。というのは，悪魔は不倫の愛の炎を大きく煽り，そのなかに風を送り込むので，火は間断なく燃え続けます。しかし，神が二人を神聖なる結婚という秘蹟で結びつけるとき，悪霊は愛の炎を結婚の初めには大きく燃えたたせますが，火そのものは小さく燃え続けます。何故なら，夫婦が結婚した日のような愛情で絶えず愛しあうならば，そしてその愛情の糧が続くかぎり，二人は決して不和にはならないからで

す。その火を悪霊が消します。悪霊は炎が日一日と小さくなり，その結果夫婦が不和になって，二人の心がすっかり冷え込むように努めます。

第二百十七話　冗談
親類同士で結婚した二人のこと

一人の司教がいました。その町には一組の男女が同棲していました。実はこの二人は近い親類同士でしたので，勘当され，非難されましたが，二人を引き離すことはできませんでした。二人は司教に使いをやって，夫婦になれるよう結婚させて欲しいと言いました。二人はほんとうに結婚したいと思っていたのです。司教は，それはできない，三親等の間柄なのだから，と言いました。その後間もなく，司教は二人を結婚させ，婚姻障害の赦免を申し渡しました。ところが一週間もたたないうちに，二人は不仲になり，司教のところへきて，別れたいから離婚させてくれ，と言いました。司教はその希望もかなえてやって，こう言いました。「よろしいかな，愛し子たちよ，神聖な結婚という秘蹟の大いなる力によって，以前住みついていた悪霊が追い払われたのだ。」

それゆえに，フランシスコ・ペトラルカはこう言っています。「結婚とは煩わしいもので，ながく続けなければならぬもの，簡単に飽きてはならぬものだ。そして結果がどうなるかが気掛かりなことを，こうした楽しみ，例えば結婚にはつきものの跳んだり，歌ったりで始めてはならぬ。」

第十九章　情事を犯す男について

第二百十八話　まじめ
特別食を食べている男もいれば，定食を食べている男もいること

結婚していないのに，女と関係する男には，三つのタイプがあります。まず第一のタイプは特定の女がいない男たちです。手近な女なら誰でもよいというわけで，年中女に言い寄っていますが，日曜日には娼家にかけつけます。この連中は手に入るところで安物の食事をする人たちに似ています。

第二のタイプは，特定の女がおり，それ以外の女と浮気せず，人目につ

かぬところや，居酒屋にたむろしていて，その女と同棲していません。二人は一週間か二週間に一度会います。このタイプの男は食堂で食事を，普通の食事をとる人たちに似ています。

第三のタイプは，特定の女がおり，それ以外の女と浮気せず，夫婦のように同棲していますが，子供はいる場合もあれば，いない場合もあります。この人たちは分厚い貨幣で人質用の食事，高価な食事を食べる人たちに似ています。人質用の食事とは，誰かが人質としてある町や，ある貴族のところへ武装した馬に乗って赴いた時のものです。人質は高価な食事をしますが，それは多額の費用がかかり，その結果拘留されている人質のためにお金がより早く支払われ，人質本来の目的が達成されるようにするためです。そうした権利は，ベヒトルドゥス・フォン・ツェーリング公[1]が例の貴族をいためつけるために考え出したのですが，その貴族は公の二人の息子を毒殺してしまいました。いまその二人の息子はゾロトゥルン[2]の聖ウルズス寺院の棺のなかで眠っていると，フェリックス・ヘメルリーン[3]が書いています。

さて，この三つのタイプのうちで，どれが神と，そしてなされるべき贖罪から最も遠いところにあるのか，とお尋ねになるでしょう。その答えは，女と同棲している三番目のタイプの男です。一番目と二番目のタイプの男が罪を犯すことはまずありません。しかし夫婦のように女と同棲している連中，その大部分が司教裁判所の首席判事や司祭たちで，この連中は女を公然と身辺においていますが，あってはならないことだから，家のなかに子供用のベットはおかないようにしています。しかし連中の目は盲目となり，他の女たちの悪例となっています。そうした生活はなかなかやめられず，連中はいい齢になるまで同棲を続け，結局悪魔の手に落ちます。悔い改めなさい... 同棲している人々にはただ一つのたとえで十分です。とい

1　Berthold von Zähringen (1050-1111) のことか。ケルンテン，シュヴァーベン，ツェリンゲンに領地をもった辺境泊。二人の息子に関する話については不詳。

2　Solothurn スイス北西部，ゾロトゥルン州の州都，旧市街に聖ウルズス寺院がある。

3　本稿『冗談とまじめ』（2），第66話の注を参照。

うのは，ワインを入れた容器が冷水にひたしてあれば，あるいはワインの瓶が枕元にあれば，飲みたいときに飲むものです。女が男から離れようとしますと，女は子供が憐れになります。男が改心しようとしますと，こう考えます。「誰がこの子を育てるのか。どうして私にこの子の粥が作れよう。」こうして連中は十年，いや二十年離れられず，そのまま死ぬことになります。たとえ二百年生きることになろうとも，離れることはありません。心しなさい。

第二百十九話　冗談
領主夫人の物言わぬ召使いのこと

昔，ある領主が奥方を連れて領地を通り騎馬の旅をして，とある貴族の館に泊りました。この貴人には息子が一人ありましたが，その子は唖でした。食事の時刻となって，この唖の息子が礼儀正しく，上品な物腰で食事の世話をしました。そしてその振舞いはすべて息子にふさわしいものでした。領主はこの息子を相手に話をしようと思いましたが，父親は，「殿様，あの子は話ができません。唖でございます」と言いました。領主の奥方は，「この男は私向きの召使いだ。口が固くて，この男に対しては恥ずかしく思う必要はない」と考えました。奥方はこの唖を自分の召使いとして是非雇って欲しいと領主にせがみました。貴族は，この申し出を領主に拒むわけには参りませんでした。

奥方はこの唖を伴って帰還しました。その後領主が騎馬旅行に出掛けた時，この唖が奥方にワインを運びました。例の男が，例の騎士が，例の貴人がやって来ました。その唖はこの事情をつぶさに見て知っていました。

それから一，二年の後，領主は唖が一度，その身内の者に会うためにと唖を連れて，その父親の許へ旅をしました。再びこの唖が食事の給仕をつとめました。領主は唖の父親に，「貴殿の息子は生まれながらの唖か，それとも病気のためか，或いは何かその身に起こったのか」と聞きました。父親は，「あの子は唖ではありません。口は十分利けますが，冗談は言えません。知ったことは隠さず口に出しますし，人々をののしり，本当のことを言います。そこで私はある時息子に口を利くことを禁じました。それで息子は沈黙を守っているのです」と言いました。領主は父親に，「頼む，あの

子に物を言わせてくれ」と言いました。父親はそこで息子に言いました。「では，せがれや，殿様に何か申し上げよ。」息子は言いました。「殿様，奥方様はこの国一番の娼婦でございます。」領主は，「黙れ，お前は喋りすぎるぞ。わしは前からそんな事は知っていたぞ」と言いました。

第二百二十話　冗談

棺の中に男が横たわり，そこへ天使と悪魔が来たこと

三人の娘を持っていた市民がいました。二人はとてもきれいで，やがて世話されて結婚しましたが，三人目の娘はひどく醜くて求婚する男はいませんでした。その町にいた年寄りの金持ちが，その娘を哀れに思って自分の妻に娶りました。この娘は老人を大事にし，愛してもおりましたので，夫の老人は自分の財産をすべて妻に遺贈しました。この老人が死んで，三十日忌がすむと，大勢の求愛者や求婚者がやって来て，こう考えました。「こいつはすばらしい獲物だ。」夜中に男たちは，その家の前で歌をうたい，笛を吹き鳴らし，リュートを弾いて御機嫌を取りました。一つの群れが他の群れの間を通り抜けることは，とても出来ない位でした。隣人たちは，彼等のために静けさが乱されたことをこぼしていました。この婦人は，ごますり男たちのことは何も気にかけていなかったし，信心深い人でもあり，こう考えました。「あの人たちは，そんな事をしても，なんにもならないということが分かれば，独りでに止めるでしょう。」ごますりたちは三人を除いて立ち去りましたが，この三人は一向に中止しようとはせず，毎晩家の前へやって来て，婦人の機嫌を取るのでした。一人は七時と八時の間に，二人目は九時頃に，三人目は十時頃にやって来ました。

この若い未亡人は，どうしてこの三人の男たちから逃れようかと考え，ある老婦人の許に行き，三人の男が仲々ごますりを止めようとしませんので，その中のどの男を夫にしたらよろしいでしょうかと助言を求めました。一人は学生で，第二の男は貴族，第三のは市民の息子で参事会にいました。世間の御婦人たちのやりとりはこんな風です。「私はその男から逃れるために，この男と結婚したのです。」そう，あなたはその男を免れたとしても，まずあなたは彼を自分のベッドに寝かせたのですよ。老婦人は言いました。「まあ情けない。そんな事をしたら恥さらしです。あなたは，その

男たちの誰とも結婚なさいますな。その男たちはあなたを求めているのではなく，あなたの財産を求めているのです。あなたが父親の家にいて貧しかった頃，誰一人やって来ませんでしたね。今裕福になったというので，あの人たちがあなたを追っかけているのです。」未亡人は言いました。「どうしてごますり男たちから逃れたらよいでしょうか。」「それでは，こうしなさい。」このことは後から述べます。そして未亡人は準備万端ととのえました。

さて最初の男がやって来た時，彼女はその男を家の中へ招き入れました。食卓には食べ物，飲物が用意されていて，その男に言いました。「あなた様は私の機嫌を取って下さいます。もし結婚したい程私を好いて下さいますならば，私のために何かして下さる勇気をお持ちかどうか，試してみたいのです。そして私はあなたに色よい返事を差し上げましょう。私が貧乏だった頃は，私の処へ来て下さらなかったのですが。」その若者は言いました。「奥様，私に出来る事ならやりましょう。死ぬまでやりとげるでしょう。」未亡人は言いました。「ズボンの上へ白い衣服をまとって，納骨堂へ行って下さいませ。其処に私の隣人が死んで棺の中に入っております。その死体を棺から放り出して，その中へお入りになって，教区の朝のミサの鐘が鳴らされるまで横になっていて下さい。それから袋を取って死人をその中へ入れて，私の処まで運んで来て下さい。そうすれば色よい返事を差し上げましょう。必ず承知の返事に間違いありません。」その若者は言いました。「喜んで致しましょう。なんでもないお易い御用です。」この男は命令された通りにやりました。

二番目のごますり男もいつもの時刻にやって来ました。未亡人はこの男にも同じ様な話をして，天使風の衣を着せ，手に聖別された一本のろうそくを持たせ，「鐘が鳴る朝まで死体の傍でじっと座っていなさい，あなたがその死体を運んで来たら，承知でございます」と言って，納骨堂へ送り出しました。この男は女に命じられた通りにしました。棺の中で横になっていた男は隙間から天使がやって来るのを見て，これは事が起こるぞと思いました。天使になった男は，言いつけ通りに座ったままでした。

未亡人は三番目のごますり男の手に一本の火かき棒を持たせて，その同じ場所へ行かせました。棺の中の男は悪魔がやって来るのを見て，下着の

中へ垂れ流すほど恐ろしくなりました。悪魔は火かき棒を使って，そこにある物越しに天使を連れ去ろうとしました。天使は十字を切り，聖別したろうそくを悪魔の顔につきつけて，お互いに格闘になり，棺の中の男は自分の命が大事だとばかり，棺の中ですっくと立ち上がり，蓋を押し開き，外へ飛び出しました。天使と悪魔は，一人は右へ，もう一人は左へと逃げ去りました。こうして未亡人は，ごますり男たちから免れました。

この婦人は，四旬節の間にきれいになった，人間のすべての魂を言い表しているとすることができます。魂が罪から清められて，美徳を積んで豊かになると，あなたの肉体，世俗と悪霊という，三人のごますりがやって来て，あなたに再び罪を犯させようと試みます。御用心下さい。Applica, ut scis et vis etc.（汝が知り，欲する通りにそれを用いよ。）

第二百二十一話　冗談
老求婚者がまだ何でも倍持っていたこと

ある時老やもめがいました。この男は昔は金持ちでしたが，今や落ちぶれてしまっていました。それでもまだ裕福であるかのように，派手な生活をしていました。男は一人の可愛い娘に求婚しました。娘はこの男に愛情を持とうとせず，ある若者に心を寄せておりました。やもめは年寄り仲間の一人に，娘をものにするにはどうしたものか相談しました。その友人は言いました。「私がいろいろなものを君に貸そう。そうでなくても君はきれいな屋敷に住んでいるのだから。それらの物を娘に見せなさい。そうすりゃあ娘は，それらの物に心を動かすでしょう。」

求婚したその老いた痴れ者は，ある時，娘の父母と娘を招き，夕食をご馳走しました。男には下男が一人いて，二人は相謀りました。主人が客に何かを見せ，部屋から出て行くときには，下男が言う手筈になっていました。「そんな物はつまらん物です。もう倍お持ちですよ。」食事の前に客たちは一緒に出かけて行き，家を見ようと思って，地下室へやって来ました。そこにはぶどう酒の入った，十か二十フーデル入りの大きな樽がありました。それもまた男の物ではありませんでした。地下室を閉めたとき，下男は言いました。「他の建物にはもっと沢山お持ちですよ。」彼らは長持の所へやってきました。そこには婦人服やマントが沢山入っていて，それを取

り出してみました。それは綺麗なもので，大いに娘の気に入りました。閉めると，下男は言いました。「そうです，倍はお持ちです。」錫製の炊事道具が目につきました。台所には鍋にフライパンが倍はありましたし，戸棚の中には銀製の食器と，何処へ行っても倍の物がありました。みんなは穀物倉へ行きました。まだまだ何でも沢山あるようでした。さてテーブルに着いて，食事をしたときには，老人は疲れて，熱っぽくなって，咳をしたり唾をはいたりし始めました。窒息でもしそうでした。何か彼の気管に入りでもしたかのように，背中を叩いてもらいました。老人は再び我に帰ると，隣に座っていた娘に言いました。「お嬢さん，咳は気にしないで下さい。たまたまのことだったんです。」そこで下男は言いました。「いえ，倍ですよ。夜昼やるんですよ。」こともあろうに，その時になって下男はこの謀り事をすっかり台無しにしてしまったのでした。そこで娘は，倍の財産があったとしても，唾を吐き散らす，じいさんペテン師の物はもう欲しいとは思いませんでした。

相変わらずこの世の常として，女や男は結婚して快楽や楽しみや財産を得ようと思ってきました。それでいて不快や借財をつくることになるものです。ピョンピョン踊り[1]に駆り立てられて，喧嘩したり，争ったり，悪口を言ったりし始めるものです。この世では貞節や純潔を守り，主なる神や，この世で貞節に生きた聖人様たちに仕えるにこしたことはないでしょう。それが最上のもので，一番安らかな生活であります。こんな言葉があります。「一度良い暮しをしたいと思う者は，可愛い娼婦と焼鶏を取るがよい。二度良い暮しをしたいと思う者は，鵞鳥を焼くがよい。朝に鵞鳥を食べ，夜には鵞鳥の胃と首を食べることになります。一週間良い暮しをしたいと思う者は，子豚を殺すがよろしい。その者は臓物やソーセージを食べます。一ヶ月間良い暮しをしたいと思う者は，雄牛を取るがよい。一年間良い暮しをしたいと思う者は，妻をめとるがよい。要するにそれくらいの長さ続いたらの話です。しかしいつもよい暮しをしたいと思う者は，私たち司祭や修道院の僧がするように，貞節で清く生きるがよろしい。しかし私たち

1　原文 Hoppertanz。Hopper とは，Frosch（蛙）のことであるから，蛙のようにピョンピョン飛び跳ねる踊りか。

が更に結婚していたいと思えば，私たちでも結婚の重荷を背負わねばならないものです。

第二百二十二話　まじめ
三人の未亡人のこと

このように良い生活を送り，もう一度亭主を持ちたがった三人の女の話を，こんな風に聖ヒエロニムス[1]は書いています。最初の女は言いました。「私を妻にしたがっている男は見つかりません。男たちは私の財産だけを狙っているのです。」もう一人の女は言いました。「私の夫がまだ私の胸の中に生きているかぎりは，まだ死んではいません。だから他の男はいらないのです。」三人目の女は言いました。「私には以前優しい夫がいました。再婚すれば，優しい夫に当たるか，ひどい夫に当たるか分かりません。ひどいのであれば，優しい夫の後にひどい夫を持つことは，私にとって辛いことになるでしょう。優しい人であったところで，今の私がそうであるように，夫に何か起きて，死んでしまうのではないかと，いつも心配していなければなりません。私たちは神を讃えて，紛れもなく未亡人であり続けましょう。」

第二十章　姦通の罰について

第二百二十三話　まじめ
食卓に髭面の首を見た商人のこと

ある商人が馬でリヨンの市へ行こうと思いました。とある森へやって来ると，そこでは一人の貴族が狩猟をしており，後ろから鹿や野呂鹿が運ばれて来ました。商人は貴族の召使いに，この貴族は何と立派な人であるかと誉め，貴族について良いことばかり言いました。召使いはとても喜んで，騎士である自分の主人のもとへ馬を走らせ，そのことを主人に伝えて，言いました。「御主人様，他国から一人の商人がやって来ました。その人は，あなた様がこの世で何と幸福であられるかなどと，あなた様のことを大変

1　Hieronimus（340－419）初期キリスト教の教父，聖人。

良く言っております。あの人に良くしてやって下さい。」騎士は商人の方へ寄って行き，商人がどこからやって来て，どこへ行こうとしているのかなどと，話をしました。町のすぐ近くまでやって来ると，騎士は言いました。「商人さん，今夜はどこに泊まられるおつもりですか。」商人は言いました。「一番良い宿屋で尋ねてみます。」騎士は言いました。「今夜は私のお客になって下さい。」商人は言いました。「ああ，御主人，それはもったいなさすぎます。」結局商人は騎士と共に馬を進めました。

彼らが屋敷内にやって来ると，一人の召使いが商人から馬を受取り言いました。「旦那様，馬の世話などなさる必要はありませんよ。私どもがお世話致します。」商人が部屋の中へ入って行くと，フランス人は実際親切な人々なのですが，そこにはちょうど清潔なシャツと，狐の毛皮の上着が置いてありました。さて，食事時になると，二人の娘を連れた騎士の妻が見事に着飾ってやって来て，客を歓待しました。皆が食卓に着きました。商人は夫人と，二人の娘と，食器類を見て考えました。「この世の中で，この騎士よりも幸福な者がいるだろうか。この人は欲しいものは何でも手に入る。」そして沢山の料理を盛った皿が運び込まれました。商人は食べて，飲みました。ところがその後で，重ねた二枚の銀の皿にのせて，長い髭をはやした生首が運ばれてきました。商人は驚いて，考えました。「ああ，何てひどいことだ。明日はお前の首もこうして食卓に運ばれるんだぞ。」それは間もなくまた運び去られ，別の料理が運ばれてきました。商人はもう食べる気になれませんでした。夫人は商人を慰めて，取りなしました。食事が済むと，皆は寝酒を飲みました。

その後商人は休むようにと勧められ，明りをもらい，すべて整えてあるので，どのベッドにでも好きなベッドに寝るようにと言われました。扉の外側から閂が掛けられました。商人は内側からも閂を掛けました。さて，壁には何枚もの幕が掛けてありました。商人は全ての物を見てみたいと思いました。ここには石弓，そこには甲冑，あそこには胴鎧，そこには槍，またここには箙（えびら）がありました。そして隅の方にも一枚の幕が掛けてあり，そこも彼は見てみました。するとそこには二人の若者が吊り下げられており，彼らは突き殺されていました。商人は自分もここに吊されてしまうのだろうと思いました。明りが消えました。彼は服を着たままでベッドに横

になりました。彼にはその夜がとても長く思われました。夜が明けると再び閂がはずされ，商人は出発の準備をしました。

朝食が出されると，騎士が来て言いました。「商人さん，昨夜の寝心地はいかがでしたか。」商人は答えました。「ひどく寝心地が悪かったですよ。私はこれまで，昨夜ほど長い夜を過ごしたことはありませんでしたよ。」騎士は言いました。「なぜですか。ベッドのシーツが清潔でなかったのですか。」商人は言いました。「シーツは非常に清潔で，きれいでした。でも，こうなんですよ。私は幕の後ろに何があるのか見てみたいと思いました。そうして私はそれらを全部見たのです。私は隅の方に二人の男が吊されているのを見つけました。彼らは死んでいました。それで私も彼らと一緒に吊されてしまうのだろうと考えたのです。目を閉じれば，髭面の生首と二人の死人が現われました。こうして私は長い夜を過ごすことになったのです。御主人，どうか私を無事に出発させて下さい。」騎士は言いました。「あなたは身も財産も安全ですよ。」商人は言いました。「でも，あなたはこれらの事が何を意味しているのかご存じですか。」騎士は言いました。「あなたは私の召使いに，私がこの世の中で大変幸福で，良い暮しをしていると話し，またそうお考えにもなりましたね。でもあなたは私の気掛かりをご存じないのです。髭面の生首は城の騎士でした。奴を私は姦通中に襲ったのです。そして奴の首をはねて，私の妻が自分がしでかしたことを考え，姦通のことを覚えているようにと，それを毎日食卓に運ばせるのです。幕の後ろに吊してある二人は，私の弟の息子たちでしたが，この騎士の親類の者たちが，罪のない二人を突き殺したのです。彼らは私を殺すことができなかったので，二人を殺したのです。私は二人をあそこに吊しました。そして私は毎日，憤怒して，罪もなく流された血の復讐をするために，二人を見に行くのです。さて，私が妻の姦通を目の前にし，罪もなく流された二人の血を幕の中に見ているとすれば，私がこの世でどんな良い暮しをしているかおわかりでしょう。ですから，商人さん，お行きなさい。そしてこれからは，どんな人の暮しも，その人の暮しを，私の暮しよりより良く知った上でなければ，良いか悪いかの判断を下さないようになさい。」こうしてその商人はそこから去り，自分の身に起こったことを語ったのでした。

第二百二十四話　冗談
ガンゴルフ[1]の妻のこと

聖ガンゴルフは伯爵でした。そして現在上部ブルグント地方で崇められています。ガンゴルフには妻がいましたが，彼女は夫よりも司祭の方が好きでした。というのは彼女の夫は非常に信心深い人だったからです。夫はしばしば妻をとがめて，妻を姦婦だと言いました。妻は，自分は常に無実だと弁明しました。ある時，二人は庭へ行きましたが，そこには泉が一つあって，それは深くはなく，水が涌き出ていました。そうして二人はその泉の側に腰を下ろしました。夫のガンゴルフが言いました。「妻よ，おまえが泉の中にある赤い小石を私に渡してくれれば，私は主なる神様が，おまえが無罪か有罪かをお示し下さると思うのだが。」妻は言いました。「そう，私がそれをあなたに渡すことができないとでも言うの。」そうして袖をまくって，石を摑みました。彼女が腕を引き出そうとすると，手は泉の中に横たわったままになりました。それで彼女は残った腕だけを引き上げたのです。こうして彼女の姦通の罪は，人々の知るところとなりました。

その後間もなく，件の情夫が彼女の夫を打ち殺しました。聖ガンゴルフは大きな奇跡をなし始めました。一つの奇跡が起こると，人々は町中の全ての鐘を鳴らしました。金曜日にガンゴルフは再び奇跡をなしました。それで鐘が鳴らされました。すると，妻の側にいた女たちが言いました。「あなたの御主人がまた奇跡を起こされたわよ。」「ええ，」と妻は言いました。「彼はまさに，私のお尻が語ることができるようになるという奇跡を起こしたわ。」すると彼女はおならをし始め，次から次へとおならをもらしました。そして，彼女が上で話すと，同時に下でも話をしました。

神が姦通の罪を，手の喪失というような明らかな例でもって，明るみに出されたことをご覧なさい。

1　Gangolf. ブルグント地方の貴族。760年に殺害される。既に10世紀からドイツでも聖人として崇拝されている。祝日は5月11日。

第二百二十五話　まじめ
不義を行った二人の男が，灰色の上着を着なければならなかったこと

ああ，皆さん，不義を行った者はすべて片手を切り落とされなければならないとなると，布地が非常に高くなるでしょう。なぜでしょうか。糸紡ぎ女が沢山いないからです。この本の著者である私が，神学担当修道士を務めている修道院があるこの町に，二人の兄弟がいました。そしてそれぞれに妻がおりましたが，二人の娼婦とねんごろになり，二人は何度も注意されました。それにも拘らず彼らは女と駆け落ちをし，妻子を捨てました。町のお役人は彼らを追いかけて捕らえさせました。二人はいろいろ非難されて，灰色の長い上着以外には，別の色のものを身につけないと，誓わねばなりませんでした。私はある時この町の大聖堂で説教をしましたが，こう言いました。「不義を行った者はすべて灰色の上着を着なければならないということになれば，貧しい修道士である私は，修道服をどこで手に入れたらよいのでしょうか。というのは不義を行う男女が沢山いて，灰色の布地が大変高くなるからです。」

第二百二十六話　まじめ
不義を行ったものの両眼がえぐり出されること[1]

昔一人の王がいました。この王は自分の国に法律を作り，姦通の罪で逮捕されたものは，男であれ女であれ，両方の目をえぐり出すことにしました。女や男の目が沢山えぐり出されました。王子が捕らえられるということが起こりました。王は他の人と同じように，彼を罰しようとしました。しかし人々が参事会と共に，王子のためにそうしないように願い出ました。王はそれに従おうとはしませんでしたが，人々が何度も頼んだので，王の心が動かされ，王は言いました。「誰も腹を立てないように，また法が損なわれないように，息子の片目と私の片目がえぐり出されねばならぬ。」これは立派な王でした。

1　Gesta Romanorum 50 に同様の話がある。

第二百二十七話　冗談
冷えた鉄で火傷した女のこと

昔一人の男がおり，妻がありましたが，彼女が不貞を働きました。その噂がこの男の耳に入りました。というのはユヴェナリス[1]が言うように，家長というものは，いつも事情を知るのは最後であるからです。彼は妻に何度も注意して言いました。「おい，お前は身の証を立てるため，熱い鉄を摑んで無実を示す勇気があるか。」妻は「はい」と言い，日が決められました。その間に彼女は司祭のところに出かけて告解をし，贖罪をして改心を約束しました。時間になると，彼女は鉄の板を両手に持ちました。夫は自分が誠実な妻を持ったことを喜んだのでした。

しかし再び彼女は，姦通の罪に落ち入るということになりました。夫は言いました。「おい，こういうことはおれの気に入らぬ。おれが参事会にいた間，今日もまた，ここにあの男がいたんだな。」妻は言いました。「あなたはそれでなくても嫉妬深く，心配性なんです。真っ赤に焼いて持っても，私に火傷をさせなかった鉄がまだそこにあります。」こう言ってその鉄の棒を手に取ると，冷たい鉄が彼女に火傷を負わせました。彼女は「助けて」と叫んで，手に息を吹きかけ水のところへ走って行って，手を冷やそうとしました。しかし火傷で皮膚がはがれました。それで夫は，妻の誠実さがどんなものであったか，よく分かりました。真っ赤に焼けた鉄は，彼女の手を焼きませんでしたが，冷たい鉄が火傷を負わせたのでした。

第二百二十八話　まじめ
炭焼きが一人の女を見たこと

ムエルディーニ伯爵という，全く敬虔な人がいました。この人は一人の炭焼きを抱えていましたか，彼のお気に入りでした。炭焼きに何か願い事があると，要求を聞いてやり，自分のところへ自由に出入りさせていました。ある時炭焼きが伯爵のところにやって来ましたが，伯爵は何か頼み事があるのだと思いました。炭焼きは言いました。「私が炭を焼いている時

1　Juvenalis（50頃－130頃）。ローマの風刺詩人。

に，あることを見ますが，あなたもそれをご覧になって頂きたいのです。」伯爵は，「お前は何を見たのだ」と言いました。炭焼きは答えました。「一人の男が真夜中になると，手に抜き身の刀を持って馬に乗って走り，その前を裸の女が走って行きます。二人が出会うと，彼は女を真っ二つに切って泉の中に投げ込み，その後馬も男も後を追って飛び込みました。」伯爵は言いました。「今夜お前と一緒に出かけよう。しかし前もって告解をしておこう。」二人は告解をしてから，一緒にそういうことが起こる場所まで出かけて行きました。真夜中頃炭焼きが言ったように，男がそこで女を追いかけました。伯爵は言いました。「神を念じてお前に懇願するが，お前は誰で，何をしているのか言ってくれ。」その男は，馬諸共静かに止まって言いました。「私は名門の騎士です。女はさる騎士の妻でしたが，私たちが姦通の罪を犯し，このように繰り返しお互いを責めさいなみ，苦しめなければならないのです。姦通から非常に多くの悪，また大きな恥辱や不利益が生ずるのですから，神が現世で姦通をかくも厳しく，また永遠に罰せられるのを不思議に思ってはなりません。」

この悪を，その罰を挙げて記述せねばならないとなると，特別な一冊の本になるでしょう。しかしこれはもともと，騎士とその愛人が救われる前の，二人の煉獄であったのです。

第二百二十九話　まじめ
情夫が夫を殺したこと

跣足会修道士ルペルツース・デ・リチオが，四旬節の説教の中で書いている話ですが，アッシジに不貞を働いた女がいました。彼女は，愛人と祝福されない結婚をしたかったので，二人は女の夫を殴り殺すことを計画しました。ある時善良な夫が帰宅して家に入ると，女が抱きしめて彼の両腕を強く抱え上げ，隠れていた人殺しがやって来て斧で殴り殺し，二人で彼を古い家の中に埋めました。次の朝早くこの女は教会に行き，夫の身内の者に，夫が今朝早く聖ヤコブ様へお参りに出かけましたが，皆さんに宜敷くと申しておりましたと言いました。親類の者は彼が内緒で出かけ，自分たちにも，特に母親にも何も言わなかったことを不思議がり，彼女に不信の念を抱きましたが，黙っていました。

その後間もなくしてある時，この女が家の中で泣き叫んだので，近所の人々がそれを聞いて，どこか具合が悪いのかと彼女に尋ねました。女は言いました。「聖ヤコブ様への巡礼の一人が，夫は道中でなくなったと話してくれたのです。」しかし彼女はその巡礼の名を知りませんかでした。親類の人々は，愛人が彼女のところに出入りしているのを見て，この女の悪事を認め，そのことをお役人に話しました。この女は捕らえられ，夫を殺してたことを自白しました。夫の死体が発見され，殺人犯は逃亡し，彼女は火あぶりの刑に処せられました。その時愛人の男は，よく見えるようにと，山の上にいました。そしてこの女への思いに駆られて近づいて来ました。偉いお役人方は彼に立ち去るように命じ，さもないと逮捕されると申し渡しましたが，彼はそれをしようとはしなかったのか，あるいはそれが出来なくて逮捕され，翌日同じ場所で首を切り落とされました。このように姦通は罰せられたのでした。

第二百三十話　まじめ
亭主が間男と自分の女房の首を切り落としたこと

修道士ヨハネス・パウリがこの書物を書いたのは，数えて一千五百十八年という年で，ターンの町で学問師父をしていました。アルザス県のコルマールから一マイルのところにゲーバーシュヴァイラーという村があって，木曜日にはコルマールで週の市が開かれるので，ある女が同じ村で大工の追い回しをしていた情夫に会うため，市に行こうとしました。亭主は女のあとをつけてゆき密会の現場を見つけ，近付いて行きましたが，彼らは格別の仕儀に及んでいて，亭主に気付きませんでした。亭主は一撃で首を二つながらに切り落とし，女房の片腕も切り落としてしまいました。女は片腕を男に巻き付けていたのでした。亭主は村に帰り，人々にじぶんの取った行動について話しました。村人たちは二人をまとめて不浄墓地の一つの穴に埋めました。

このように死に値する罪を犯し，呵責ない裁き手の前に引き出されるとは，なんという哀れな魂でありましょうか。でも法は述べているのです。Qualem te invenio（我，汝を如何なる人物として見出すのか。）「私はお前のあるがままを見てお前を裁く。」

第二百三十一話　まじめ
ロジムンダが二人の男を殺害したこと

私たちは長髭族，ロンゴバルディの歴史の中で，彼らがアルクイーヌスとよぶ王を戴いていたことを読みます。彼はイタリア王を打負かし，これを殺し，その頭蓋骨を取り出し，密かに銀で被わせ盃まで作ったのでありました。イタリア王には一人の娘が遺されましたが，その娘をアルクイーヌスは妻に娶りました。さて，国王アルクイーヌスがヴェローナ，すなわちディートリッヒのベルンに滞在した時，国王はいつもより陽気で，酒を余計に過ごしました。そして，例の盃を取り出すと，妻のロジムンダに見せて言いました。「そなたの父上とともに飲め。」奥方は酒を頂戴したものの，その言葉を理解しませんでした。が，父親の頭蓋骨から酒を飲んだと知った時，彼女は夫である国王に対し激しい憎悪をいだきました。

さて，彼女の腰元たちの中に，ある騎士が心を寄せる乙女がいました。奥方はこのことを心に刻みつけておりました。ある時，国王がちょっとした遠乗りに出かけたとき，ロジムンダは，その腰元に言いました。「あなたの恋人に今晩来るように言いなさい。あなたの代わりに私がベッドに入っております。その者に私はいささか話すべきことがあるのです。」腰元は仰せのとおりにしました。騎士が訪ねて来て，奥方に対してその情欲を満たしたとき，ロジムンダは言いました。「私が誰かそなたご存じですか。」騎士は言いました。「私の愛しい人では。」奥方は言いました。「私はロジムンダです。」騎士は驚いて言いました。「奥方様，あなたはここで何ということを為さっておられまするか。」奥方は言いました。「そなたはこの私で，その思いを遂げました。そなたには何としてもわが夫を刺し殺してもらわねばなりません。さもなければ，夫の剣がそなたを殺すに相違ありません。夫は私の父を打ち殺し，しかも父の頭蓋骨から私に酒を飲ませたのです。ですからそなたは夫にたいする私の恨みを晴らさねばなりません。」騎士は言いました。「そのようなことをみずから致すつもりはありません。しかしそうなる様に段取りはいたしましょう。」奥方は言いました。「そなたはじぶんでやらねばなりません。今夜はどの部屋も開けてあるのがお分かりになれましょう。剣はすべて結わえておきますから一本たりと抜けはしま

せんし，またそれを繋ぎ合わせておきますから壁から一本たりと外すことはできません。」こうして二人の企て通りに事は運び，殿居の人々は夜になって吊り燈，燭台を手もとに置くだけでありました。騎士は部屋の戸口から入ってきました。王は騎士に気づき，裸のままベッドから跳び起き，剣に手を差しのべましたが剣は王の手には渡りませんでた。そこで王はベッドの手前にあった小椅子をひっつかむと雄々しく防戦しましたが，騎士は鎧を着けていたので，王は騎士に手傷を負わすこともできませんでした。こうして騎士は王を刺し殺してしまいました。ロジムンダは黄金，財宝，宝石などそこにあったものを取りあつめ，二頭の馬に積み，手に手を取ってその場を立ち退き，ラヴェンナに行って互いを結婚相手とさだめました。

それから数年後，彼女はラヴェンナで一人の若い貴公子を見て，好意を持ち，夫と別れられたら良いのにと思いました。ある日夫が酒を命じました。そのとき，彼女はその酒に毒を仕込みました。騎士はそれを飲むとすぐ，毒と感づいて，言いました。「この人殺し奴！わしに毒を盛ったな，おまえにも飲ませてやるぞ。」女はそれを拒みました。そこで騎士は抜き身を突きつけて女に飲むように強要しました。こうして二人は屍を並べてそこに倒れ伏したのでありました。これが彼らにふさわしい姦通と殺人の報いでありました。

第二百三十二話　まじめ

ローマにいる男を，百マイル離れたところから射殺そうとした男のこと

聖ペテロ，聖パウロに詣でようと，ローマに向けてある男が出立いたしました。男が遠くに離れてしまうと，その女房はべつの男に愛情を寄せました。この男，いわゆる世故にたけた放浪学生などと呼ばれる手合いでしたが，これがその女との結婚を望んだのでありました。女は言いました。「うちの人はローマに行きました。もしかしてあの人が死んでしまうか，または，あなたが殺してくれるなら，どんな男よりもまずあなたを選びますわ。」彼は言いました。「判った。俺ならご亭主をうまく殺せるぜ。」そして六ポンドもの蠟を買い，一体の蠟人形を作りました。

さて信心深い亭主がローマ市内を歩いていると，当地の男がひとり，近

付いて来て言いました。「これは死神の息子どの。なぜお前はあちこち歩き回っておられるのじゃ。だれかがお前を助けてくれなんだら，今日のお前は生きていて，しかも死んでいるのじゃよ。」亭主は言いました。「なぜ生と死が一つの事なのですか。」男は言いました。「わしの家においで。それをお前に教えてあげよう。」男は彼を家に連れ帰り，風呂を用意し，その中に入れ，一枚の鏡を手渡して言いました。「中を見てごらん。」男はかたわらに座ってなにやら本を読み，それから言いました。「鏡を見てごらん。中に何が見えるかね。」風呂の中の男は答えました。「私の家でだれか男が蠟人形を壁に立て掛け，出ていったと思ったら弓を持ってきて，それを引き絞って人形めがけて射ようとしています。」すると男は言いました。「命が惜しかったら，そ奴が矢を射ようとしたとき水の中に潜るのだ。」亭主は言いつけに従いました。男のほうは本を読み，そして言いました。「どうだね。何が見えるかね。」亭主は言いました。「見えました。あの男は矢を外しました。とても残念そうです。それと私の女房が男と一緒におります。遍歴の学生は矢をつがえて再度弓を射ようとしています。前に進んで距離を半分に詰めました。」「身を屈めるのだ，男が矢を射るときに。」彼は身を屈めました。「覗いてごらん。何が見えるかね」と，男は聞きました。亭主は答えました。「あの男は射損じてとても残念そうです。そしてもし三度目も失敗したらじぶんのほうが死んでしまうなどと女房に話しています。いま，矢をつがえて，射損じのないよう人形にとても接近して立ちました。」この時，本を読んでいた男は言いました。「体を屈めろ。」亭主はその矢を外して身を屈めました。男は言いました。「顔を上げてごらん。何が見えるかね。」「あの男が射損じたのが見えます。矢はあの男に当たって死んでしまいました。それから私の女房がその男を家の床下に埋めています。」すると男は言いました。「さあ，立ち上がってお帰りなさい。」亭主は男に贈り物をしようとしました。しかし男は何一つ受け取ろうとせず，言いました。「私のために神に祈って下さい。」

亭主が家に戻ると，女房は彼を愛想よく出迎えようとしました。亭主はこんな女に情けは無用と思い彼女の親戚連中を招き寄せ，何とひどい女を私に寄越したのか，と言いました。そして彼女の取った行動を皆のものに話しました。女房は終始そのことを否定し続けました。女房は間男を埋め

てしまっていたので，そこで亭主は親戚の人々を案内し，男をふたたび掘り起こしました。かくして女房は捕らえられ焼き殺されました。これは彼女に対する当然の報いでありました。

第二十一章　酩酊について

第二百三十三話　冗談
ぶどう酒を飲んだことのない男のこと

ある時，一人のシュヴァーベン人がローマへ行きました。イタリアの国へ入ると，上等のイタリアのぶどう酒を出されましたが，これまでぶどう酒を飲んだことがないので，それが何であるか分りません。そこで亭主を呼んで耳打ちして，ここに出されているのはどういう液かと尋ねました。亭主は相手がどういう客であるか，ちゃんと見抜いて言いました。「神様の涙[1]ですよ。」シュヴァーベン人は天を仰いで言いました。「ああ神様，なぜ私たちの国へも涙を落として下さらなかったのですか。」

第二百三十四話　冗談
杯[2]に刺された男のこと

一人の男がおりました。飲み過ぎて病気になり，医者を呼びにやりました。医者が来て脈を取り，飲み過ぎであることをちゃんと見抜いて言いました。「あなたは，杯に刺されたのですよ。」すると病人は言いました。「先生，そうと分っていたら，グラス[2]で飲めばよかった。」気に入らなかったのは容れ物で，ぶどう酒ではなかったのです。

宗教でもそうです。この世が気に入らぬ人間がかなりおります。「そうだ」とこの人々は言います。「この世には誠実なんてものはない。あるものは不実と虚偽ばかりだ。」この世は気に入らないのに，金銭，黄金，美女，暴飲暴食，これは気に入るのです。そしてもう大酒が飲めなくなると，口

1　原語 Gotz Trehen（＝Gottes Tränen）。普通 Lacrimae Christi とラテン語で言われるのは，ヴェスヴィオ山麓産の有名なぶどう酒の名である。

2　原語 Becher, Glaß。一応日本語風に区別して訳したが，両方とも所謂「コップ，グラス」の類で，ただ前者には脚や把っ手がない。

惜しがったりする。のどの渇きを抑えるものは何も食べないのに，飲むことができるようにと，腸詰を焼かせたり，燻製の肉を出させたりします。これは大罪というものです。

第二百三十五話　冗談
海上でどっさり塩を舐めた男のこと

海上でこれと同じことをした男がおります。船が難破するのを，とても心配していた時のことです。誰もが叫び，祈りました。告解しようとする人も何人かいました。海の中へ沈むのではないかと怖れたのです。船に一人の旅の職人が乗っていて，袋を取り出しました。中にはチーズと塩漬けの肉が入っていて，職人はそれを食べ，その上たくさんの塩を舐めました。まじめな人々が職人に言いました。「そうやってたくさん塩を舐めながら，おれたちが，助けてくれと叫ぶのを聞いているとは，一体どういうつもりなんだ。頭がおかしいんじゃないか。」「お前さんたちこそ頭がおかしいんじゃないのか。今日はたっぷり飲まねばならん。だから，飲むことができるように，しょっぱいものをうんと食っておかなきゃならんのだ。」

第二百三十六話　冗談
熱はさましたいが，のどの渇きはさましたくない男のこと

一人の男がおりました。熱があって，身体が熱いのでたくさん飲みました。一人の男がその男の所へ来て言いました。「おいきみ，きみをすっかり健康にしてやりたいが，どうだ。」その男は言いました。「だんな，ぜひ熱をさまして健康にしておくんなさい。しかしのどの渇きは治してはいけませんぜ。こうしてひんやりとのどを入るのは，何ともいい気持ちですからな。」

第二百三十七話　冗談
風呂へ入ると，のどの渇く男のこと

ある時，一人の男が言いました。「私はいつでものどが渇いている。」もう一人の男が言いました。「どうしてだい。」前の男が言いました。「風呂へ行くと，そのあと一週間のどが渇いている。それで一週間に一回風呂へ行

く。だからいつものどが渇いているのさ。」

一つの諺があります。「眠れない者は説教に行け。祈れない者は海へ行け。飲めない者は風呂へ行け。」第四番目は，中で悪気（わるげ）のない茶番をする乗合馬車に向いています。つまり，「りんごの嫌いな者[1]は頭を中剃りさせるか，僧衣を着けよ」というのです。司祭になって，頭に中剃りができ，首に僧衣がまつわれば，たちまちこの世で敬虔で貞潔であるというのなら，およそこの人たちほど不貞な人はいないのです。ご用心。

第二百三十八話　冗談
堆肥の中に寝ている組合長のこと

二人の仲間が一緒にぶどう酒を飲んでいて，二人とも酔っぱらってしまいました。みんなが寝てしまうと，自分たちも寝たくなりました。一人が相手を家へ送って行くと，今度はその男がまた相手を家へ送って行き，こうして送りつ送られつしているうちに，とうとう二人は堆肥の上に寝てしまい，ベッドに寝ていると思っていました。さて朝早くなって，人々が教会へ行くとき，一人の男が言いました。「誰だ，ここにいるのは。誰だ。」すると一人が答えました。「ここにいるのはおれたち豚だよ。」男は二人が誰だか知りたいと思って，そのうちの一人をよく見ると，それが組合長であることが分り，言いました。「これは，これは，組合長さん，あなたなんですね。」

町々には組合長はもっと大ぜいいると思います。それで，こんなふうに飲んだくれの組合長を亭主に持つ可哀そうな女房たちは，きっと嬉しがることでしょう。そうは言っても亭主たちは，共有家畜の番人の代りをしているのでない。夜なかに家に帰ると，ぶどう酒の臭いをぷんぷんさせ，まるで便所の中にでも寝ているようです。そして朝になると，口の中は苦くて酸っぱいのです。誰でも自分自身を知るようにしなさい。

1　りんごは愛の象徴。女性への愛に関心のない者。

第二百三十九話　冗談
ろばの方が主人より賢いこと

こういう男の一人が，ある時，ろばに水を飲ませに泉の所へ連れて来ました。ろばはたっぷり飲むと，しきりに家に帰りたがりました。男はもっと飲むようにろばに頼みました。ろばはしきりに家に帰りたがります。そこで男は言いました。「たしかに，お前はおれより利口だな。お前はたっぷり飲むと，止める。おれはもうたっぷり飲んでいても，仲間たちのためにいよいよまた飲み始める。」

「節度は万事に役立つ」という言葉があります。何人も飲んではならない。飲んでも飲み過ぎないように，けじめがなければならない。ところが，あの人たちのけじめとは何でしょう。ある人は，グラスやジョッキにもう一滴もなくなるまで飲む。二人目は，目から涙が出るまで飲む。三人目は，もう息ができなくなるまで飲む。四人目は，ぶどう酒が口の中で苦くなるまで飲む。「そうだ」とこの連中は言います。「おれたちは節度がある。一飲みで一リットル空ける。」こういう汚らわしい輩（やから）は，小さな輪[1]などより国に有害です。誰でも酩酊しないように気をつけなさい。酔った人間に何か起って，死にでもすれば，やはり即座に地獄に落とされるでしょう。分別を失っていて，臨終に「おお神様，私を憐れみ給え」と言うことができないからです。聖パウロは言っています（『コリントの信徒への手紙　一』第六章）。「酒に酔う人々は決して神の裁きを受けることはない。」[2]

第二百四十話　冗談
鹿が片足を折り，ワインを飲もうとしなくなったこと

昔，ある貴族が一頭の鹿を飼っていました。この鹿はおとなしくて，素晴らしい角をかざして食卓へやって来て，ワインやビールを飲むことが出来ました。ある時鹿は，飲み過ぎて，いつもより良い気分になり，飛び跳

1　不詳。原語 ein kleiner Reiff。16世紀頃ぶどう酒商人は，酒樽のたがを意味する輪を長い棒の先につけて軒先に出していたが，その輪のことか。

2　この箇所にこの言葉はない。第6章第10節に「……酒におぼれる者は，……決して神の国を受け継ぐことができません」とある。

ねて状況を見誤り，丸太の中に飛び込んで脚を折りました。その後鹿は，生涯ワインもビールも飲もうとはしませんでした。

この鹿は，飲み過ぎて自ら病気になり恥をかいても，またその後，始めのように大酒を飲む，多くの人よりは思慮分別がありました。フランシスコ・ペトラルカは，書簡第三十五［de rebus familii］（家族の事柄について）で飲酒について色々なことを書いています。「人々が飲む最初の杯は，なみなみと注ぎますが，それはad sitim（渇きのため）に必要なのです。二杯目は楽しみに，三杯目は食欲を増すために，四杯目は酔っぱらうのに必要ですが，五杯目には腹を立て，六杯目には不和や喧嘩となり，七杯目には怒り狂い，八杯目には眠り込み，九杯目には病気になるのです。」

第二百四十一話　まじめ
酔っぱらった女は何も分からないこと

ヴァレリウス・マキシムスがある男のことを書いています。この男には妻がいましたが，ある時彼女が酔っぱらいました。この男にそのことが告げられると，彼は妻を殴り殺しました。何故なら，女は酔っぱらうと，自分が何をされたのか分からないものであると，考えたからです。この男はおのれの残忍さによって，罰せられるということでしょう。

第二百四十二話　まじめ
酔えば告解より多くのことを口にすること

一人の女性がいました。彼女は少女の時に，何かあることを行ったことがありました。恐らく過ちを犯したのでした。彼女は結婚しましたが，腰を下ろすといつもため息をつきました。夫は，「何か気にかかることがあるのか」と，言いました。この妻は夫に何も話そうとはしませんでしたが，ある時，恐らく何か死に値する罪が自分にはあるということ，そして一度もそれを告解したことがないということを肯定しました。夫は考えました。「妻が告解をするようにするには，罪をどのように聞き出したらよいのだろう。」そしてある時，彼女にワインを腹一杯飲ませ，完全に酔っぱらわせました。酔っぱらったので彼女は，自分が少女の時に行ったことを漏らしました。夜が明けると，夫は言いました。「おい，一緒に来い。告解しに

行こう。」妻は言いました。「今告解とは，どうしたんですか。」夫は妻に，彼女が罪を犯したが，それをまだ一度も告解していなかったと，昨晩自分に言ったのだと告げました。そして厄介払いをするために，今正しい告解をしなければならないと言いました。この妻は，それを口にして夫が知ったことを耳にすると，大変に恥じて首をくくりました。

賢者は，酔いのあるところ秘密はない，と言っています。（箴言　第31章[1]）それ故酔った司祭に告解をしてはなりません。酔っぱらいは，聖職者であろうと世俗の者であろうと，黙っていることはできないからです。また酔っている人々を，参事会の中にいれてはなりません。彼らは何も隠してはくれないからです。酩酊が告解の秘蹟より強力にならないように，また酔いが，告解では言えないことを言わせるということを，人は見て取らねばなりません。

第二百四十三話　まじめ
酩酊を選び，姦通を犯した修道士こと

ある市民の家に一人の修道士がいて，神に仕えておりましたが，悪霊の誘惑に大変悩んでいました。ある時彼は言いました。「悪魔め，言ってみろ。私が安らぎを得ているに，何を私に求めるのだ。」悪魔は言いました。「三つのものの中から選べ。お前が同居している家の夫人と，不義を犯せ。」この修道士はそれをやろうとはしませんでした。悪魔は言いました。「夫の方を叩き殺せ。」修道士はやろうとしませんでした。悪魔は言いました。「それなら一度，酒を腹一杯飲め。」修道士は言いました。「それをやろう。」そしてある時ワインを腹一杯飲んで，不義を行い，上述の夫人と淫らな行いをしました。その時夫がそこへやって来て，修道士を殴ろうとしましたが，修道士はその夫を殴り殺し，三つの悪行をすべて行いました。

心して下さい。

1　この箇所にこの意味の言葉はない。箴言第20章には「悪口を言い歩く者は秘密を漏らす」とあり，第31章には「飲めば義務を忘れ」とある。

第二百四十四話　冗談
ノアが四種の血をぶどうの木に注いだこと[1]

創世記第九章には，こう書いてあります。「その時ノアは洪水の後，ぶどうの木を見つけ，ぶどうを作り，ぶどう酒を飲んで，酒の力を知らず眠り込み，恥部を見せて裸で横になっていた。」この物語の中で著者は，sicut repletionem（補足するかのように）こう語っています。「腹一杯食べると，悪い欲望が後を追いかけるように，酔った後では腰をあらわにするのが続くのである。」別の書ではこう書いてあります。「ノアがぶどうを植えようとした時，ノアは四つの穴を掘り，その一つに猿の血を，第二の穴には豚の血を，第三の穴には羊の血を，第四の穴にはライオンの血を注いだ。これらの動物の性格を，酒を飲む人々が備えているからである。」

第一の人々は猿と同じで，飛び跳ねて上機嫌であるが，そういう人は身体の中の肋骨が折れても，酔いがさめる翌朝までそのことを知らないでしょう。こういう人々は猿であって，猿がやってみせることを，また行おうとするのです。第二の人々は豚であり，酔っぱらうと唾やげろを吐き，ベンチの上よりはむしろベンチの下に横になり，他の豚のように，堆肥の中で横になるのです。第三の人々は小羊で，酒を腹一杯飲むと，宗教的なことに取り組んで，告解や地獄のことを語り，自分たちの罪を泣き悲しみ，そればかりか酔っている不幸を泣き悲しむのです。彼らは世の中をすべて改革しようとしますが，翌朝になると，そのことについては何一つ知らないのです。第四の人々はライオンと同じで，戦い，争い，傷つけ，世の中のすべてを殺してしまおうとします。どなたも，自分がどれに似ているのか，参考にして下さい。

第二百四十五話　まじめ
修道士の会議で宗規が改められたこと

ある時修道士たちが一緒に野原を通って行きました。その修道士たち

1　Gesta Romanorum 159には，創世記のノアの話と関係づけて，同様にぶどうに，4種の動物の血で作った肥やしを注ぐ話がある。

は，俗世の大きな組合であるワイン同好組合にも属しておりました。従ってその修道士たちはワイン好きなのです。修道士たちがある居酒屋へやって来ますと，そこの亭主は修道士たちにまず上等のワインを出し，次に種類の違うワインを持ってきて言いました。「皆さまがた，このワインも試してみて下さい。」一番のお偉方には，最初のワインがとても美味しく思われたので，言いました。「亭主，我々は二種類のワインを飲むことは許されないのだ。そんなことをすれば，宗規違反なんだ。一種類のワインにしておくよ。」お偉方は，恐らくこれより上等のワインは出て来ないと思ったのでしょう。亭主は心の中で思いました。「おまえたちには，次の時にはもうこんな上等なワインを飲ませてやるものか。」修道士たちはそこを立ち去り，修道士の会議に出かけました。会議が終わり家へ帰ろうと思った時，修道士たちは，いつまたあのワインの所へ出かけられるのか，毎日指折り数えました。

さて修道士たちが再び同じ亭主の所へやって来ると，亭主は修道士たちに辛口のまずいワインを出しました。修道士たちはそれを飲むと，そっぽを向き，互いに顔を見合わせました。修道院長が言いました。「亭主，もっと甘口の上等のワインはないのか。これはこの前のワインとは違うぞ。」亭主は言いました。「あの樽は終わってしまいました。もっと良いワインもありますが，あなたがたに差し上げるわけには参りません。食事の際，一種類のワインしか飲んではいけないと宗規で決められていると，この間おっしゃいました。」修道院長が言いました。「いや，亭主。思い違いをしないでくれ。さあ最上のワインを持って来てくれ。我々は修道士の会議に出かけていたのだ。その条項は改められたのだ。霊も飲みたがっているのだそうだ。」亭主は言いました。「ああ，それでは霊も身を持ち崩したがっているのですね。」云々。

パウロは言っています。「Eph. 5. Nolite inebriari.（エフェソの信徒への手紙　第五章　汝ら，酒に酔わされるなかれ。）」ヒエロニムスも言っています。「Venter mer.（腹を清らかに。）[1]」ご注意が肝要云々。

1　このラテン語の意味不明。mer は merus か。

第二百四十六話　冗談
試しに飲んで酔っぱらってしまった男のこと

またも一人の男について読みますが，その男は仲間と一緒に飲むことはありませんでした。しかしいつもあちこちに出かけ，梯子酒をして歩き，動けなくなるほど酔っぱらいました。ある人がその男に言いました。「お前は酔っぱらっている。歩き方を見てみろよ。」その男は言いました。「でも俺はがぶ飲みはしなかったよ。」相手の男が言いました。「でもお前はワインを試しに飲んで，酔っぱらってしまったのは本当だ。」

この戒めは，自堕落な行為をすることを望まない人間に対するものです。しかしこのような人たちも，そのような行為を試してみたいと思うものです。それは，永劫の罪が生ずる恐れのある欲望を，心の中で考えることです。それ故考え始めた時に阻止すべきなのです。というのは，考えることから行為へと進むからです。肉を食べることを望まない者は，肉汁も飲んではいけないのです。蛇の頭が中へ入れば，身体全体も中へ入るのです。考えるということは，すでに蛇の頭なのです。Ecclesiasti. 21. Quasi a facie colubri fuge.（シラ書〔集会の書〕第二十一章，汝，蛇の姿から逃れるごとく逃れよ。）

第二百四十七話　冗談
他人の杯から飲もうとしなかった男のこと

またまた一人の男について読みますが，その男は誰にも自分の杯を使うことを許しませんでした。つまり誰もその男の杯から飲んだ者はなかったのです。ある時たまたまその男は海に出ていました。すると風が海へ吹いてきて，船に乗った者たちは，自分たちが沈んで溺死するに違いないと心配しました。その船にはまた別の男がいて，海の性質をよく知っており，その男に言いました。「あなたにとって好ましかろうと不快であろうと，あなたは今日は他の者たちと，その者たちの容器から飲まねばならないし，他の者たちもあなたと共に飲むであろう。」これは，乗船者たちが溺死するかも知れない時の海のことを言ったのです。

こんなふうにただ酒を飲むことにだけでなく，その容器や飲み方に大き

な喜びを求める多くの人たちがいます。ある者はなめるように飲み，ある者はがぶ飲みし，ある者は歯の間からワインを飲んだりすすったりして，飲酒がその人に長い間心地よく感ぜられます。飲むとき喉が乾いていれば，うってつけです。飲むとき喉が乾いていなくて，ワインを一気に口の中へ注ぎ，口を開けたり閉じたりするならば，それは適切ではないのです。

第二十二章　食事について

第二百四十八話　冗談
司祭が釜の中へズボンを投げ入れたこと

けちん坊の司祭がいました。その司祭は，スケヴォラのように，どんな司祭とも一緒に食事をしましたが，誰もその司祭と一緒には食事をしませんでした。さてたまたまその司祭が仔豚を屠殺したことがありました。全ての物が取り出され，料理女が内臓や臓物ソーセージを大きな釜の中へ入れ，そういう際に行われるように，それを煮ようとしました。他の司祭がその家へやって来て，釜が火の上にかかっているのを見て，言いました。「火にかかっている釜の中には何があるのか。」けちん坊の司祭は言いました。「女中が前掛けとシャツを中へ入れて，洗おうとしているのです。」けちん坊の司祭は，その司祭が一緒に食事をするのではないかと気がかりでした。その時誰かがドアを叩きます。そこでけちん坊の司祭が出て行き，その人を中へ入れようとします。客の司祭は下シャツとズボンを脱ぎ，それも釜の中へ投げ入れようと思います。司祭がまさにそれを投げ入れようとすると，そのけちん坊は叫びます。「駄目だ，駄目だ。お前はわしの晩飯を駄目にしてしまう。」司祭は言いました。「それはどういう晩飯なのだ。」けちん坊は言いました。「それは女中の台所着です。」しかしその臓物は，けちん坊司祭にはあまり好ましいものにはなりませんでした。

第二百四十九話　冗談
ミラノの大食漢のこと

ミラノの公爵フランチスクスは，ジフロヌス・フォン・アストという名前の大食漢のことを聞き，ある時その男を招待しました。その男が四羽の

焼鶏，四羽の山うずら，四十個の堅ゆで卵，一ポンドの古いチーズ，さらに召使たちがその男の前へ用意した，そう言っても信じられないほど沢山の他の物を食べました。その男は全部を食べ終わり，公爵はその男の様子を傍で眺めていました。男は立ち去ろうと思い，言いました。「公爵さま，私がご存念にふさわしいほど大食でなかったとしたら，お許し下さいますようお願いします。私は今晩はあまり調子が良くなかったのです。これからは，その点を改めたいと思います。」

第二百五十話　冗談
ミロ[1]が死んだときの様子のこと

ヴァレリウス・マキシムス[2]，他の多数の史家，そしてアリストテレスがミロと言う名の男について書いています。この男はソクラテスの弟子で，非常に力が強かったので，ある日牛を一頭背負って三十マイル歩き，その牛を平手で打ち殺して一度に食べてしまいました。そしてこの男が老齢になって，ある森のなかを歩いていますと，一本の樫の木が倒れていました。その樫の木には百姓の手で樫の楔が打ち込んでありました。ミロは自分の力を試そうと思い，両手を裂け目に入れて，その木を縦に裂こうとしました。すると楔が飛び出して，木の裂け目が閉まり，ミロは両手をはさまれて，手錠をかけられた状態になりました。そこへ野獣が何匹かやって来て，ミロを食べてしまいました。

フランシスコ・ペトラルカの『幸福と逆境に対する手当について』[3] 第一巻第五章を見なさい。そこでアリストテレスは，中庸が求められているとき，如何ほど食べたらよいか，と問うています。アリストテレスの弟子たちは言いました。「ミロは手控えて，牛を食べるのは半分だけにしておくべきだった。そして食べていない人がまかり出て，その牛の残りの半分を食

1　Milo von Kroton 紀元前500年頃，ギリシャのクロートンの有名な運動家，オリンピアのレスリングで6回優勝している。

2　Valerius Maximus 紀元前一世紀前半のローマの著述家，“Facta et Dicta Memorabilia”（著名言行録）なる著作がある。

3　ペトラルカ（1304－1374）が1360年から66年にかけて書いた “De remediis utriusque fortunae” のこと。

べたならば，それが中庸というものだったであろう」と。そこでアリストテレスは言いました。「いや，そうではない。中庸というものは分別のなかに，一人一人の人間が生きていくために必要なだけ飲み食いするという分別のなかに，見出されるべきものだ。ある人にとって少なすぎるものも別の人には多すぎるということがある。手工業に従事する人は他の職業に従事する人よりも多く食べなければならないし，手職人のなかでも皮なめし職人は仕立屋よりも多く食べなければならない。何故なら皮なめし職人は水のなかで仕事をするからである。それ故ひとりひとりが自分の中庸を求めなければならない。」大食について書くならば，それだけで一冊の本が出来ましょう，しかも本物の本が。

第二百五十一話　冗談
千グルデンの馳走のこと

夫に先立たれた女王がローマ見物のためエジプトからローマへやって来ました。その名をクレオパトラといいました。そして出迎えたのがアントニウスという名のローマの高官でした。クレオパトラとアントニウス，この二人は会うやいなや意気投合しました。そこでアントニウスは女王に敬意を示そうと思い，高価な宴会を準備して，他の賓客をもそこへ招きました。さて，皆が食卓につくと，高価な馳走が運ばれました。その時クレオパトラは心のなかでこう思いました。「これは一市民には荷が重すぎる。かかる宴会をはるのは王者のすることだ」と。そこで食事が終わったとき，女王クレオパトラはローマ人アントニウスに礼を述べて言いました。「アントニウス様，私たちは高価な馳走にあずかりました。しかし私があなたに供しようと思う馳走にくらべれば何んでもありません。一品の価格が千ドカーテンの馳走なのです。」ローマ人は言いました。「もし貴方が私に千ドカーテンの馳走を供して下さるなら，私は二千ドカーテンを払いましょう。」女王は言いました。「アントニウス様，賭けましょう。」そして互いに手を打ち合わせて約束して，言いました。「しかし誰にその裁きをつけてもらいましょうか。」アントニウスは言いました。「経験豊かな老齢の騎士に頼みましょう。」一人の騎士が選ばれました。

さて，その日となって皆が食卓につき，裁き役も他の人々ともども着席

しますと，高価な馳走，それぞれが四十乃至五十グルデンもする馳走が沢山続々と運び込まれました。アントニウスは心のなかで思いました。「女王の負けだ。女王が勝つことはありえない」と。食事が終わりに近づいたとき，クレオパトラは銀の器を手にとって，それを侍女に手渡し，酢をもって来るように命じました。それから，それを少々別の器に移し，自分の頭の右側に手を伸ばし，王冠から大きな真珠をとり，それを酢のなかにひたしました。真珠が溶けて，溶液，即ち粘りけのある液体ができると，それを女王は飲み込みました。（真珠は酢に溶け，珊瑚はオオトリトマラズ，即ちいばら酸の液に溶けるということです。）次いで女王クレオパトラは頭の左側に手を伸ばしましたが，王冠のその部分にも同じ大きさの真珠があり，女王はそれをも飲もうと思ったのです。その時裁き役の騎士が女王の手を押さえ，そうはさせじとして，言いました。「女王様，貴方様の勝ちです。その真珠は千ドカーテン以上の値打ちがあります。」

覚えておきなさい。持たざる者は持てる者に道を譲るべきです。同様に私たちも様々な料理，高価な馳走で名をあげ，賞賛を得ようとしますが，それはどの人にも相応しいわけではありません。普通の男は来客があるとき，普段より一皿余分にだせばそれで十分です。お偉方はそうした場合一皿余分に出さねばなりません。お偉方が貧乏人のようにふるまえば軽蔑されるでしょう。高価な馳走，美味しい料理を出すことは，それが罪であろうとなかろうと，その際相手の人柄，考え方，時，そしてその国の習慣が考慮されなければならないでしょう。

第二百五十二話　まじめ
食べることに喜びを感じないようにしようとして失敗し，絶望した男のこと

ヤコブス・デ・ヴィトリアコ[1]の書物によると，ある男は神に仕え，現世から身をひき，あらゆる娯楽と世俗的なことを断つ決心をして，言いました。「私はもうこの世では食べることにも，飲むことにも喜びを見出さない

1　Jacobus de Vitriaco（1170－1240）フランスの聖職者。“Orientalis et occidentalis Historia”（東西物語）なる著作がある。

ようにするつもりだ。しかし彼は食べたり，飲んだりすれば必ず喜びが伴うものだと知ったとき，絶望して言いました。「私は天国に行けない」と。

それは間違いだったのです。例の賢者ソロモンが次のように言っているのももっともなことなのです。[Eccl. 7. Noli esse nimis iustus.（コヘレトの言葉，第七章　余りに正しくあろうとするなかれ。）[1]]「善人すぎるな。」何故ならば，すべての大罪から身を守ろうとすることは，小さな試練，粥のなかのぶよではなく，敵のはなった大きな虻だからです。あれもこれもと気を病む人は，結局間違った考えに陥り，途方に暮れて，聴罪師の言葉を信じません。その聴罪師がどんなに学識があり，老練な人であってもです。その聴罪師が何を言い，何を忠告しようとも，スープの上の自分の考えが最良の，最も気のきいた考えで，ほかの考えはすべて駄目，告解病にかかっていることになります。覚えておきなさい。

第二百五十三話　まじめ
何人も十字を切ることなしに食べてはならないこと

聖グレゴリウス[2]が『対話』のなかで書いているところによりますと，ある尼僧は祝福なしに，すなわち十字を切ることなしにちしゃの葉を食べたため，悪魔がその尼僧の身にのりうつったといいます。同様に，ほかの大勢の人々がこの話を書いています。聖書を読めば，十字を切らずにちしゃの葉を食べたため悪魔にとりつかれた人の話がのっています。それ故に食事前に言葉と動作で祈ることを子供たちに教えなさい。そして自分でもそれを実行しなさい。何故なら道徳面では言葉より実践のほうが，より多くの人々の心を動かすからです。少なくとも主禱文[3]，または聖なる三位一体の御名［In nomine patris et filii et spiritus sancti amen］（父と子と聖霊の御名において，アーメン），または聖なる十字架にかかげられた称号［Jesus Nazarenus ein Kunig der Juden］（ユダヤ人の王，ナザレ人のイ

1　旧約聖書，コレヘトの言葉，第7章，第16節参照。
2　Gregorius I（540頃－604）ローマ教皇，聖人。修道生活と奇跡信仰を説く“Dialogi”（対話）なる著作がある。
3　主禱文とは「天におられるわたしたちの父よ」で始まる『マタイによる福音書』第6章，第9節から第13節までの言葉。

エス），またはイエスの御名を口にしなさい。そうすればあなたたちの身に悪いことが起こることはないでしょう。しかしあなたたちは食事の際に祈ることを恥ずかしがります。それどころか，豚が飼料桶，生ごみに突進するように食卓にむかい，沢山はいるように胴着を開き，ベルトをゆるめ，容器すなわちお腹に余地を作ろうとします。食卓につくときはベルトをきつく締め，腹一杯食べ，食べ終わったら再びベルトをゆるめるほうがよいのです。それなら食べ過ぎるということがないし，腹八分に収まるでしょう。仲間のためにも是非一度それを試してみなさい。仲間のためにはバーデンへ行ったり，会合で瀉血治療をする人もいるのですから。ところが実際には，私たちは袖をまくり上げ，ナイフをといで食べる準備をしますが，それはまるで牛を一頭屠殺しようとしているみたいです。同様にまた，食事中にも祈りなさい。そして神が私たちに授けてくれた料理を神に感謝しなさい。そして樫の木から立ち去る豚のように食卓を離れてはいけません。というのは豚はどんぐりが何処にあるかを探すだけで，どんぐりを落としてくれる木を見るために，目を上げることは絶対ありません。そうなのです。私たちは食後神に感謝の祈りを捧げるべきで，自分を偉いと思っている領主のまえでは，ただ二言三言いう以外，感謝の言葉を述べる必要はないのです。

あなたがた俗人が宴会をひらくとき，その食後の感謝の祈りはどんなものでしょうか。「さて，楽士さんよ，演奏を始めてくれ。どんちゃか，どんちゃかやってくれ。」そしてユダヤ人が満腹になると，子牛のまわりをうろついたように[1]，踊りまわります。だって空き腹ではうまく踊れないからです。私たち僧侶が記念日とか司教座聖堂参事会に参列し，お布施をもらい，Pro defuncutus（亡き人のために）を祈るとき，その食後の感謝の祈りとはどんなものでしょうか。うまくすると，一枚の皿にもう一枚の皿がかぶせられて持って来られます。上の皿を上げますと，三枚ないし四枚のカルタと十個ないし十二個のさいころがはいっています。それが僧侶の聖務日課で，連中は誰がお布施を全部もらうかで賭をするのです。まるでユダヤ人がキリストの着衣を賭けたのと同じです[2]。それが私たちの食後の感謝の

1　旧約聖書『出エジプト記』第32章，第1―10節参照。
2　新約聖書『ヨハネによる福音書』第19章，第24節参照。

祈りです。気をつけなさい。